

被説得性の測定(2)

—対人関係と関連して—

稲越 孝雄

§ 1. 被説得性の形成に関与するもの

現代は情報化社会であるといわれ、現代人は毎日、多くの情報の氾濫の中で生活を送っている。それらの情報は受け手に対して、何らかの意味で送り手の立場を受け入れる事を勧誘する意図をもっているコミュニケーション、即ち説得的コミュニケーションであることが多い。これらの説得的コミュニケーションに遭遇した時、ある者は非常に受容的であり、あるものは逆に極度に拒否的であり、他の者は case-by-case の反応を示す。

稲越¹⁰⁾はこの様な傾向の一貫性を示す概念“被説得性”についての因子分析的研究によって「情報」「関心」「判断における主観・客観」の三因子を抽出した。しかしながら筆者が本研究に着手した意図は、このような特性の個人差を判定することに止まらずその成立過程を究明することにある。そこで先ず、その成立過程に関して簡単な考察を加えてみよう。

現代社会の中で人が説得的コミュニケーションを受け取る源泉はマス・コミュニケーションとパーソナル・コミュニケーションに大別し得る。そして被説得性はまさに、この両コミュニケーションの機会を媒介として形成されるであろう。

マス・コミュニケーションに関して言えば、現代の児童はかなり幼い時からテレビと接する。昭和36・37年に文部省が行なった調査⁹⁾によれば、幼児でテレビを意識的に見るものの比

率は、満2歳までに、11.2%、3歳までに、39.6%、そして満歳6までには98.2%である。即ち学齢までに殆んど幼児は意識的にテレビを見るようになる。更に小学生では毎日平均2時間30分程度がテレビの視聴時間であることもよく知られている事実である²⁾。テレビは、このようにコミュニケーションの源泉として重要な意味を持っている以上、幼児や児童の被説得性の形式にとって無視できない意味を持っている。しかしながら、これまでにテレビの視聴行為が広く性格一般にどのような累積的影響を及ぼしているかについては、ほとんど明確な資料が示されていない。例えばNHK放送文化研究所が行なった、いわゆる“静岡調査”⁸⁾では、テレビ視聴が児童の受動性を助長するか否かを調査したが、その関連性を示すような結論は導かれていない。

説得的マス・コミュニケーション効果に関する Klapper J.T.⁶⁾の理論によれば、通常“受け手の効果の必要かつ十分な原因として作用するものではなく、媒介的諸要因と諸影響力の連鎖の中で、その連鎖を通して機能する”のである。ここで媒介要因として考えられるのは例えば、家庭環境、属性、所属集団などである。特に性格形成との関連で考えれば、家庭環境が最も深いつながりを持っているであろう。

筆者は被説得性に関しては、必ずしも Klapper の理論が妥当するものとは考えない。しかしこの点は、今後筆者に課せられた課題であることを銘記して、本研究における焦点をバ

パーソナル・コミュニケーションとの関連に置くことにしよう。幼児にとって最も意味のあるパーソナルコミュニケーションは親との間に交されるそれである。しかしながら幼児期において親子間に交されるコミュニケーションは殆んどの場合、単なる情報内容の伝達ではない。子供が親にコミュニケーションする際には多くの場合、子供が親に何らかの要求を示していると考えてよいであろう。非常に広範囲な要求がそこには含まれているが、しかしそれらの背後には殆んど“愛情を求める要求”が潜んでいると考えられる。形式的には単なる事実の伝達に見えるような会話の中にも、これは含まれている場合が多いであろう。

他方、親から子供にコミュニケーションされる際にもまた、要求が含まれている。この際の要求は、子供の行動に対して社会的規準に外れぬことを求める場合が多い。即ち親→子のコミュニケーションは、社会化の過程において発せられることが多いであろう。

このような子→親及び親→子のコミュニケーションは、それぞれ受け手の承認及び不承認という2つの結果をひきおこし、その組み合わせによって4つの場面について考えることが出来る。

①親→子（承認）……この結果に対しては当然、親から子に対して何らかの賞讃のことばあるいは、あらかじめ約束された賞が付与されることが多いであろう。したがってこのようなコミュニケーション形態は強化され、このような親子関係が多い場合には被説得的な性格が形成される可能性が期待されよう。

②親→子（不承認）……この結果は非常に複雑な結果が予期される。親子関係の類型によって、専制的な親は実力行使をし、民主的な親は更に説得すべき手だてを行ない、拒否的な親は拒

否的な態度を示すことが多いであろう。それ故、このようなコミュニケーションPatternの多い場合の被説得性に関しては予測が困難である。

但し親の反応にもかかわらず、子供が不承認の経験が多いということは、そのこと自体が説得されなかった体験の累積である。従って不承認の結果に伴う報酬が親以外の源泉から与えられる可能性のある場合、或は両親間の対立などによって、不承認行為が、他の親からの報酬を伴う場合には低い被説得性の形成が予想されるのである。

③子→親（承認）……このような体験の多い子供は、親から受容されることによって、親に対して安定した愛情関係を持ち得る。従って他の機会に親から提示された要求コミュニケーションに対してもこれを承認する事が多いであろう。勿論、親の受容の方法によって、(放任的であるか、民主的であるか) 必ずしも一義的ではないが、高い説得性を形成する可能性が多い。

④子→親（不承認）……このような体験の多い場合、子供は要求コミュニケーションが拒否される過程を通して、愛情関係の拒否を味わうであろう。従って親→子コミュニケーションに際してはこれを受け入れることによって愛情関係を復活したいと望む場合が少なくないであろう。しかしながら、親→子コミュニケーションは必ずしも愛情関係の復活に成功するとは限らない。更に、子供はコミュニケーションの受け手としての行動形態として目の前に見ている行動モデルは、受け手（親）の「不承認」の態度である。そのため、これを形態として模倣すれば、その受け手としての行為は「不承認」という結果を導き易い。このような状況においては低い被説得性の形成が予想されるであろう。

§ 2. 対人関係と被説得性

これまで親子関係を被説得性との関連でのみとらえて来た。しかしながら親子関係は子供にとって同時に対人関係のあり方を学習する機会でもある。従ってある対人関係のタイプと被説得性の高低は深い関係を持っている事が予想される。発達的に考察すれば、親子関係の接触は当然、コミュニケーション関係が成立するに先行するものである。特に母親との関係において、暖かい満ちたりた人間関係が、授乳などを通して形成される事が、社会的発達に際して対人関係の様式を決定することに深い関連性をもつであろう。そのようにして形成された基本的人間関係の上に、更に、前記のコミュニケーション関係は形成されるのである。

対人関係の類型の一つにSchultz⁹⁾の提唱したThree-dimensional theoryがある。彼は対人関係の規本的な次元としてInclusion(包括)Affection(愛情)Control(統制)をとりあげた。それぞれの次元の意味するものは下記の通りである。

Inclusion..... 相互作用と関係し、人と満足な関係を結び、これを維持しようとする欲求である。

Control..... 統制および権力に関して人と満足な関係を結び、これを維持しようとする欲求である。

Affection..... 人と愛情を媒介として結び合いたいという欲求である。

更に彼は、これらの欲求はそれぞれ積極的な側面(expressed)と消極的な側面(wanted)があるとしている。

さて、ここで前記のコミュニケーション関係の分類に視点をもち、これをSchultzの三次元に関連させて考察してみよう。

①親→子(承認)型……このような親子関係は対人関係においても受動的なPatternを形成しやすいことは推察に難くない。しかし子供の側は必ずしもそのような対人関係に満足し得るとは考えられない。積極的な行動を行ないたいという欲求は潜在的に持つに至るのではなからうか。即ち顕現的な対人関係においてはControl wantedであり、潜在的にはControl expressed, Affection expressedの欲求を持つ対人関係の形成が予想される。

②親→子(不承認)型……コミュニケーション関係においてこの形態が多いということは前述した通り、それ以前の親子関係における愛情関係の不成立が前提となっている場合が多いであろう。従って子供は対人関係の顕現型としてはいずれの次元においても強いPatternを示さず、潜在的にはAffection Wantedの傾向が非常に強いことが予想される。

③子→親(承認)型……このtypeの子供は、対人関係においても積極的な行動の結果が常に強化されている。従って顕現型としてはinclusion expressed, control expressed, Affection expressedの傾向が示されることが多いであろう。

④子→親(不承認)型……愛情関係において、積極的な行動が拒否される経験をする場合が多いので、対人関係では次第にAffection wantedの傾向が顕在型として形成されるであろう。しかし潜在的にはAffection expressed, inclusion expressed, control expressedの傾向を保持しているであろう。

以上、親子関係を通して、コミュニケーション関係、対人関係について、かなり模式的な考察を加えて来た。この中にはかなりのCausal jumpを含んでいるが、それを前提としてTable 1の如き仮説が導かれる。

Table 1 被説性と対人関係に関する仮説

被説得性	型式	Affection	Control	Inclusion
高	顕	expressed		sxpressed
	潜	(expressed)	(expressed)	
低	顕	wanted		
	潜	expressed	expressed	(expressed)

() はやや弱い傾向を示す。

§ 3. 実験報告

上記の考察にもとずいて提出した仮説 (Table 1) を検討するために行なった実験について以下、報告をする。

方 法

①被験者 東京教育大学心理学科79名, 東京学芸大学心理学科42名, 計 121 名に施行したが, 延 3 回にわたる測定を通して完全な資料を得られたものは78名であった。以後の分析は, この78名に関するものである。

②被説得性テスト……Janis (稲越邦訳)¹⁰⁾による被説得性テストを中一週間においた2回の機会に実施した。(テストに関する詳細は文献(10)参照)

③対人関係意識の測定……Schultz (中村邦訳⁷⁾)によるFIRO-B scale(Fundamental Interpersonal Relations Orientation-Behaviorの略)を用い, これを「現実」と「理想」の2水準にわたって測定を行なった。「現実」は, 被験者の対人関係の顕現型を反映するものとして考えた。また, 「理想」は, これを「現実」と比較することによって, 対人関係における潜在的な欲求を測定しうるものと考えた。

各々の水準に際してのインストラクションは次の通りである。

「現実」;

「これからお配りする質問紙は, 皆さんが毎

日の生活をどのように送っているかを知るためのものです。毎日の生活をふりかえって, ありのままに, (イ) から (ハ) までの項目の中から一つだけを選んで○をつけて答えてください。」

「理想」;

「先程は, 皆さんの生活をありのままに答えていただきました。ところが, 私達が日常経験するように, 私達の毎日の生活は, 必ずしも自分がしたいと思う行動がとられているとは限らず, 自分が“こうなりたい”と思うような自分の姿であるとは限らないわけです。そこで, 今度は, 自分が“こうありたい”という理想を考えて, あてはまる項目の一つ○をつけてください。」

尚, 施行に際しては, 実験者が各問題を順次読みあげ, 読み終わってから, 10秒たつまでに○をつけさせ, 10秒経過後直ちに次の問題を読みあげるという方法を続けた。

結果の処理

①被説得性テスト……変化のあった項目毎に1点 (または-1点) を与えて, 被験者毎に合計した。従って得点の理論的分布範囲は+24~-24である。

対人関係意識の測定……各次元の一方向を測定するための項目例えば (Affection-wanted) が9個あり, 解答 Scale (6件法) の位置によって二分し, (イ)~(ハ)に答えた者 (例えば「ほかの人と一緒にいますか」の間に「いつでも」, 「しばしば」, 「ときどき」, 「いっしょにいる」と答えた者) に1点, (=)~(ハ)に答えた者「たまたま」, 「いっしょにいる」, 「めったに一緒にいない」, 「けっして一緒にいない」と答えた者) に-1点を与え, 個人毎に, 次元方向ごとにまとめて合計した。この際下記の三つ

の指標を得た。

(ア)対人関係意識得点 (現実水準) …項目別

$$\text{粗点の和 } \left(\sum_{i=1}^9 X_{Ri} \right)$$

(イ)対人関係欲求得点 (A)…項目別「理想」

から「現実」をひいたものの和

$$\sum_{i=1}^9 (X_{Hi} - X_{Ri})$$

(ウ)対人関係欲求得点 (B)…差の絶対値の和

$$\sum_{i=1}^9 \{|X_{Hi} - X_{Ri}|\}$$

各指標の得点の理論的な分布範囲は困は(ア)が +9 ~ -9, (イ)が+18~-18, (ウ)が+18~0 である。

結 果

①被説得性得点

被検者78名の得点の分布は Table 2 の通りであった。

Table 2 被説得性得点の分布

得 点	男	女	全 体
-1	1	1	2
0	0	0	0
1	1	1	2
2	2	1	3
3	2	0	2
4	2	2	4
5	0	1	1
6	1	1	2
7	1	4	5
8	1	0	1
9	1	3	4
10	2	10	12
11	5	1	6
12	1	3	4
13	2	1	3
14	2	5	7
15	0	3	3
16	1	1	2
17	2	2	4
18	0	2	2
19	1	0	1
20	0	1	1
21	0	4	4
22	1	1	2
23	0	1	1
24	0	0	0
計	29	49	78

男女の中央値を比較すると、有意な差は見られなかった。

Table 3 被説得性得点の男女差

	男	女	全 体
10 点 以下	14	24	38
11 点 以上	15	25	40
計	29	49	78

(注) Table 2 にもとづいて分布の正規性の検定を行ったところ、 $X^2=5.53(.30 > p > .20)$ で、母集団が正規分布であるとは言えなかったため、平均値の差の検定を行なわなかったが、平均値をとると男子 9.65, 女子 11.55 であった。

②対人関係の諸得点

(ア)対人関係意識得点

各次元, 方向別の平均点は Table 4—(1), (2) に示されている。男子の結果と女子の結果を比較すると、男子の方が Control expressed の傾向が強く ($t=3.22 p > .01$) 他の次元, 方向では殆んど差が見られていない。

Table 4—(1) 「現実水準」の平均点 (男性)

次 元	方 向	平均点	
		expressed	wanted
Inclusion	(包抱)	5.37	3.18
Control	(統制)	3.00	1.44
Afftion	(愛情)	4.87	6.37

Table 4—(2) 「現実水準」の平均点 (女性)

次 元	方 向	平均点	
		expressed	wanted
Inclusion	(包括)	5.61	3.65
Control	(統性)	1.83	1.22
Affection	(愛情)	5.35	7.17

(イ)対人関係欲求得点 (A)

平均点は Table 5 に示されているが、男女の比較を見ると、男性は女性よりも、もっと対人的なはたらきかけをしたいと感じており (Ie), 他人から愛情をうけたいと感じている (Aw) ことが明らかになった。また、女子は男子よりも、より他人に対して統制的なはたらきかけをしたい (Ce)と感じていることも明らかになった。

Table 5—(1) 欲求得点 (A) の平均点 (男性)

次 元	方 向	expressed	wanted
Inclusion	(包括)	2.43	9.96
Control	(統制)	2.05	-4.67
Affection	(愛情)	5.62	8.48

Table 5—(2) 欲求得点 (A) の平均点 (女性)

次 元	方 向	expressed	wanted
Inclusion	(包括)	0.37	6.97
Control	(統制)	3.29	-2.84
Affection	(愛情)	3.47	4.50

欲求得点 (A) の平均値の男女差の検定

次 元 (方 向)	t (又は t')	有意水準	(df)
I (e)	t = 4.03	***	(76)
I (w)	t' = 1.28	n. s	(27)
C (e)	t = 2.48	*	(76)
C (w)	t' = 1.23	n. s	(27)
A (e)	t' = 1.06	n. s	(27)
A (w)	t = 7.96	***	(76)

(注) 分散の同質性が保証されなかった項目においては Cochran-cox の方法により検定を行なった (t' で示してある)

(ウ) 対人関係欲求得点 (B)

この得点の意味は、自分の現実の行動の認知と、自分の理想とが、方向性はともかくとして、とにかく差があることである。即ち得点 (A) よりは意味づけはやや不明瞭になるが、とにかくその次元 (方向) に何らかの問題を感じているということが言えるであろう。

男女の比較からは、男性はより、対人的な働きかけをすること (Ie) および働きかけをうけること (Iw) において、女性より問題を感じており、人から統制的な働きかけをうけることに対して (Cw) 女性より問題を感じていることが明らかになった。

一方女性は愛情をうけるという対人関係において (Aw) 男性よりも問題を感じていることが明らかにされた。

Table 6—(1) 欲求得点 (B) の平均点 (男性)

次 元	方 向	expressed	wanted
Inclusion	(包括)	8.71	10.95
Control	(統制)	9.09	8.10
Affection	(愛情)	9.04	4.91

Table 6—(2) 欲求得点 (B) の平均点 (女性)

次 元	方 向	expressed	wanted
Inclusion	(包括)	6.45	6.89
Control	(統制)	8.79	6.47
Affection	(愛情)	7.21	6.90

欲求得点 (B) の平均値の男女差の検定

次 元 (方 向)	t (又は t')	有意水準	(df)
I (e)	t' = 2.26	*	(27)
I (w)	t' = 2.52	*	(27)
C (e)	t' = 0.21	n. s	(27)
C (w)	t = 2.35	*	(76)
A (e)	t' = 1.36	n. s	(27)
A (w)	t = 5.23	***	(76)

③ 被説得性得点と対人関係の諸得点との関係 (ア) 対人関係意識との関係

男性の場合には、被説得点の低いものほど Control expressed で、Affection wanted の傾向があったが、いずれも有意の相関はなかった。一方女性の場合には、被説得点の低いものほど Affection wanted である傾向が有意な相関 (1%水準) で認められた。他方 Control wanted との関係は有意ではなかったが男子と

Table 7 対人関係意識点と被説得性得点の相関表

次 元	男 性		女 性	
	expressed	wanted	expressed	wanted
Inclusion (包括)	.217	-.242	-.038	-.015
Control (統制)	-.296	-.044	.297	-.250
Affection (愛情)	.161	-.363	-.299	-.560**

は逆に、高被説得点のものが Control expressed である傾向が示された。(Table 7)

(イ)対人関係欲求得点 (A) との関係

男性では高被説得点の者が Control expressed (1%水準), Affection expressed (5%水準) であることが認められた。

Table 8 対人関係欲求得点 (A) と被説得性得点の相関表

方向 次元	男 性		女 性	
	expressed	wanted	expressed	wanted
Inclusion (包括)	-.253	.138	.173	.421*
Control (統制)	.667**	.095	-.230	-.195
Affection (愛情)	.495*	.205	.339*	-.311

女性では高被説得点のものが Inclusion wanted であり (5%水準), Affection expressed (5%水準) であることが認められた。また, 低被説得者が Affection wanted である傾向がみられた。(Table 8)

(ウ)対人関係欲求得点 (B) との関係

男性では高被説得点の者が Affection の次元で expressed でもあり, wanted でもある傾向が示されたが有意ではなかった。

Table 9 対人関係欲求得点 (B) と被説得点の相関表

方向 次元	男 性		女 性	
	expressed	wanted	expressed	wanted
Inclusion (包括)	.831	.170	.442*	-.346*
Control (統制)	-.044	.118	.397*	.200
Affection (愛情)	.298	.274	-.207	-.453**

女性では有意な項目が多く, 高被説得者は Inclusion expressed であり, Control expressed であることが認められた。(5%水準) また, 低被説得者は Affection wanted (1%水準), Inclusion wanted (5%水準) であることが認められた。

考 察

被説得性と対人関係との関係を, 「意識点」との関係を一応, 仮説における顕現型, 「欲求得点 (A)」との関係を, 仮説における潜在型であるとしてまとめると Table 10-(1), (2) の如くなる。

Table 10-(1) 被説得性得点と対人関係(男子)

被説得性	型式	Affection	Control	Inclusion
高	顕			
	潜	expressed	expressed	
低	顕	wanted	(expressed)	
	潜			

Table 10-(2) 被説得性得点と対人関係(女子)

被説得性	型式	Affection	Control	Inclusion
高	顕		(expressed)	
	潜	expressed		wanted
低	顕	wanted		
	潜	(wanted)		

これを Table 1 の仮説と比較検討してみよう。

男子の場合, 高被説得者に関して顕現型では, 仮説を支持する証拠を見出されなかったが, 潜在型において, Affection, Control のいずれも仮説が支持された。低被説得者では逆に潜在型では仮説を支持する結果は見られなかったが, 顕現型において, Affection wanted である仮説を支持する方向がみられた。一般的に仮説は支持される結果が見出されたと言って良いであろう。

他方, 女性の場合には, 対称的に殆んど仮説を支持する結果が見られていない。低被説得者が Affection wanted が顕現型であることは仮説を支持するが, 高被説得者に関しては殆んど仮説通りの次元 (方向) は示されなかった。この結果は, 仮説を導く段階において「性差」を

無視したことに起因するものであろう。

本研究の中からもこの点に関して幾つかの点を拾いあげることが出来る。被説得性の男女差に関しては、既に述べたように、かなり大きな平均値の差が見られ、更に多くのサンプルによって研究すれば有意差が検出されることが期待される。従来の研究では稲越¹¹⁾が中学生を対象として女性の方が被説得性が高いことを見出しており、アメリカ人を対象としたものでは Janis⁴⁾が高校生を対象として同様な結果を見出している。しかも、この研究において彼は特定のパーソナリティ特性と被説得性との関連を問題にしたのであるが、男性において示された関連性が女性では全く見られなかった。このことは、女性に期待される「社会的な役割」が、同性間での個人の発達過程の差以上に重大な条件差となっているのではないかと考えられるのである。この点は、社会的な刺激に対する反応という意味で、類似の研究といえる“同調性”の研究においても、Beloff, H¹⁾, Norman, S. E⁸⁾らの結果は、いずれも女性の方が同調傾向が大きいという事実を示していることなどからも裏づけられる。

更に本研究で見出された点について付言すれば、高被説得者では、男性は潜在的に Control expressed であることが仮説通り見出されたが、女性では見出されなかったことの原因として、Control expressed の欲求得点の男女差があげられる。女性ではこの得点が高いことを見出されるので、被説得点とこれと双方が一般的に高いということが、当然相関係数を低める原因となっている。

以上を総合すると、男性では、被説得性の形成に関して、親子関係のパターンを中心として分析してゆくことが実りのある結果を導き出す期待を抱かせた。他方、女性に関しては親から

「女性として何を期待されたか」及び、本人が「女性の役割として何を取得しているか」といった面にもわたって究明してゆくことが今後の課題である。

引用文献

- 1) Beloff, H. Two forms of social conformity; acquiescence and conventionality J. abnorm. soc. psychol. 1956 99~104
- 2) NHK 放送世論調査所 テレビと生活時間 1967 日本放送出版協会
- 3) 布留武郎・石渡高子, 児童の余暇活動に及ぼすテレビの影響——第2次静岡調査中間報告V——文研月報 1960 11.
- 4) Janis I. L. & Field, P. B. A Behavioral Assessment of Persuasibility; Consistency of Persuasibility; Consistency of Individual Difference (in Hovland C. I. & Janis, I. L. eds "Personality and Persuasibility" chap. 2) 1959.
- 5) Klapper, J. K. The Effect of Mass Communication 1960 (NHK放送研究室訳 マスコミュニケーションの効果 1966 日本放送出版協会)
- 6) 文部省 テレビジョン影響力調査報告書(昭和36・37年度)
- 7) 中村陽吉 集団状況における個人の反応とFIROスコア 1963 人文学報(東京都立大学) p. 53~68.
- 8) Norman, S. E. Conformity as a function of different reinforcement schedule J. abnorm. soc. Psychol. 1966 176~180.
- 9) Schutz C. W. FIRO-A Three Dimensional theory of Interpersonal Behavior 1960 New York Holt & Winston Inc.
- 10) 稲越孝雄 被説得性の測定(1) 1968 立正女子大学短期大学部研究紀要
- 11) 稲越孝雄 中学校生徒におけるコミュニケーションに対する感受性に関する一研究 1962 東京教育大学卒業論文(未発表)